

自分の思いを伝え 聞き合う活動を通して 想像力を広げて表現していく姿

宮下 智子

1 条件設定に当たって

創造的な表現活動を実践していくためには、まず自分の思いを明確にもつことが大切である。形や色、イメージから感じたことを、自分の価値意識と表現方法で具現化していく。それを言語化することによって、他者に自分のイメージしたことを正確に伝えることができると考える。言語に置き換えることは、自分の考えを客観的に見つめ直すことにつながる。言語を介して他者とかかわることは、多様な考えを知ることになり、新たな想像と課題意識を芽生えさせるであろう。他者の考えの根拠や表現方法を知りたいと自ら願うことは、必要感のある話し合いを生み、共感したことや比較したことなどをふまえて自作品に活かせるものを選択することは、表現内容の幅を広げることにつながると思われる。以上の考えを基に、「自分の思いを伝え 聴き合う活動を通して 想像力を広げて表現していく姿」をめざす条件として以下の三点を設定した。

- ・条件A 課題に対する意欲が持続する
- ・条件B 自分から求めて話し合いをする
- ・条件C 多様な考え方から選択する

2 条件について

・条件A 課題に対する意欲が持続する

自ら進んで形や色、材料などに働きかけ、自分がイメージしたことを表現したい、話したいという思いがつのり、課題意識は生まれる。その意識を高めるためには、創造的好奇心が湧き上がり、意欲が持続する課題設定が有効であると考える。意欲が持続し高まることで、他者の表現内容や方法についての興味や関心が強まり、他者とのかかわりの必要性を感じるであろう。話す聞く活動を通して、自分の思いとしっかり向き合う好機を得ることもできると思われる。そこから新たな課題解決の意欲が生まれ、自分の明確な価値意識をもつことに結びついていくと考える。

・条件B 自分から求めて話し合いをする

自分の思いをもち、相手に伝えたい、聞いてほしい、相手の思いを知りたいと願うことから話し合いが始まる。自分のイメージを言語化することは、客観的に自分を見つめ、自分の思いを把握することにつながる。自分の思いが明確になることで、自ずと課題意識も高まるであろう。子どもが課題意識をもち、自ら求めて行う話す聞く活動は、自分の思いの高まりとともに、個々の中に強く印象付けられ、創造的な表現活動に活かされていくと思われる。そこから得た知識や体験は、自分のものとなり、次の活動への意欲にも結びついていくであろう。

・条件C 多様な考え方から選択する

自分の思いを話し、聞き手からの反応を得ることで自分の思いを再認識したり深めたりすることができる。また、互いの共通点や相違点をみつけ、比較することで自分の思いを見つめ直すことができると考える。相互交流することで子ども一人一人の考えは深まり、表現の幅が広がる場合は多い。その反面、自分の思いを見失う子が見られる場合もありうる。大切なのは、多様な考えを知ることで、共感したり、比較したりして自分の思いと真摯に向き合う過程である。そして友達のよさを受け止めた上で、自分の価値意識を明確にもち、「描きたい、つくりたい」と思うものに最適なものを選択して表現していくことが重要である。他者とのかかわりの中からよりよい表現方法と出会い、自己作品に活かしていく姿を目指す。

3 おもな実践

2年生・3年生・4年生の「絵や立体、工作に表す」の授業場面で実践を行った。

・条件A 課題に対する意欲が持続する

物語性、系統性のある題材設定や、意外性（発見）、前後のつながりがある課題づくりを取り入れることは、子どもの想像力や次の活動への意欲を培うことに有効であると考える。表現意欲の持続が話す聞く活動と結びつき、明確な課題意識や自己表現の広がりにつながっていくことを願って実践を試みた。

2年生の題材「□□たまご」では、まず自分たちが見たことがある（知っている）たまごについて話し、次にあつたらおもしろいな、すてきだなと思うたまごについて発表し合った。花模様のたまごや虹色のたまごなど、子どもの思いは模様や色をイメージしたものにとどまった。そこで、たまごの方向を横、斜め、下向きなどに変えて子どもの前に提示した。すると、「寝ているみたい」「ジャンプしそう」と形や動きに着目した新たなイメージを引き出すことができた。魚型のたまごや羽のあるたまごなど、次々とアイディアが出されていった。

パスの線描やぼかしを使って、見た事がない不思議なたまごができるあがつたところで、教師が「たまごを割ったら本当に何かが生まれてきそうだね」と搖さぶりをかけると、「四葉のたまごからお花の妖精が生まれるよ」「シャボン玉のたまごからドラゴンが生まれるよ」と、子どもは話し始めた。また、友達のたまごを見て「顔や角があるからすごく面白いものが生まれそうだね」「お化けが生まれるんだよ」（写真1）、「カラフルなたまごだからきっとカラフルなものが生まれるんだね」「おいしそうなお菓子にしようかな」（写真2）と話し合いを始める子も見られた。形や色、イメージを言語化することで、自分の作品への思いを明確にすることことができたようである。また、友達の作品を見た感想を話すことで、互いのよさを認め合う場をもつこともできたと思われる。

次の題材「□□たまごから○○が生まれるよ！」を紙粘土で表現することを伝えると、子どもは「早くつくりたい！」と積極的に製作に取りかかった。二つの題材につながりがあり、表現意欲、課題意識を持続することができたと思われる。紙粘土の可塑性を活かし立体を強く意識する子ども（写真1）、色づけにこだわる子ども（写真2）など様々な表現が出てきた。また、たまごが割れて○○が現れるところを物語の一場面のようにイメージし、展示方法にもこだわりをみせる子どもが現れた。子ども一人一人が自分のたまごとそれから生まれるもの、自分の価値意識をもって意欲的に表現しようとしていた。

課題に対する意欲が持続することは、自分の思いを深く見つめるだけではなく、他者とのかかわりを強くするように感じた。自分が明確な価値意識をもつと、他者の考え方や表現に対する興味、関心もふくらんでいくようである。

・条件B 自分から求めて話し合いをする

図画工作的な視点（形や色、イメージなど）をもった話す聞く活動は、子ども一人一人が思いを共有できる。さらに、自ら話し合いに強い必要感をもったとき、話し合いは深まり、自己表現にも広がりが見られると思われる。ここでは、共通体験を通した実感のある話し合いから、表現の新たな気付きや発見が見られることを願って実践に取り組んだ。



写真1

「顔のたまごから楽しいおばけが生まれたよ」

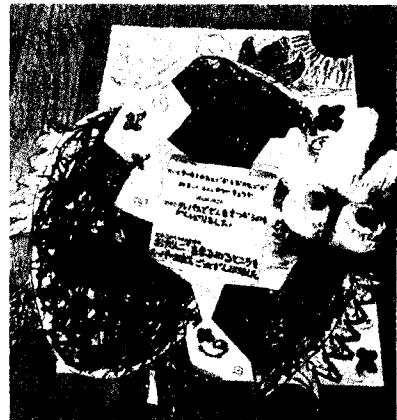


写真2

「サーカスのたまごからおかしがうまれたよ」

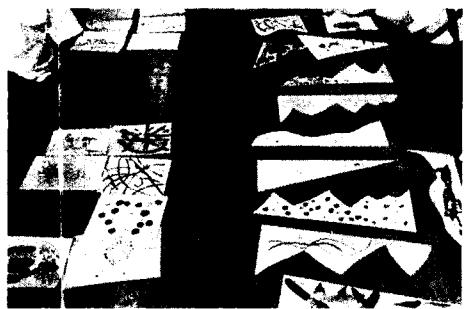


写真3 ①切って切って…②描いてぬって
・直線と曲線を組み合わせる
・八つの技法を試す

A児:Tさんが言った通り、つんつんは筆を立てて描くと、きれいにできました。

B児:とんとんは、水を使わずに、スポンジを照る照る坊主みたいな形にもって、軽くたたくとフワッとできました。

資料1 ②描いてぬって…
子どもの振り返り



写真4 ③つなげてつなげて…
いろいろな角度から作品を見合う

とはずれにくくいね」というように違う意見に対しても、進んで話し合おうとする姿が見られた。製作が始まると、「背が高くなるようにつなぎたい」「絵の具の技法が一番きれいにできたものを目立たせたい」など一人一人が自分の課題をもつことで、自ずと互いのつなぎ方を見合い、それぞれの工夫を発見し合うことができた。

「どこから見てもすてきな冠」を視点に作品鑑賞をした。その中で、一人の子どもが「冠を下から覗き込むと面白い形が見えるよ」と発言したことから、全体の鑑賞の仕方に変化が見られた。立体作品は角度を変えて作品を眺める楽しさがあることが、実体験として強く印象付けられたのである。「上から見ると鳥が羽を広げているように見えるよ」「冠の内側にも模様を描いてあるのが素敵だね」と次々と子供の発見や認め合いの場が広がっていった(写真4)。

自ら求めて行う話す聞く活動は、活発な伝え合い、聞き合いの姿となり、表現活動の楽しさや深さを共有できたようである。

3年生の題材<①切って切って…②描いてぬって…③つなげてつなげて…>は、①カッターの使い方、②絵の具の技法、③冠づくりの三つの題材を関連付けて授業を行った(条件A)。

①は四つ切りの白ボール紙を八つにカッターで切り分ける活動で、子どもの発想は直線に偏る傾向が見られた。そこで直線と曲線の特性に着目した話し合いをもつことで、線の組み合わせ方に変化をもたらすことができた(写真3)。

②はモダンテクニックを中心とした絵の具の技法を学習した。(モダンテクニックは子どもがイメージをもちやすいように擬態語で表している。)八種類の技法を試す中で、子どもは容易な技法と困難な技法があることに気付いた。子どもによって難しいと感じる技法は様々であった(写真3)。そこで「水加減」を視点として与え、技法について感じたことや思ったことを話し合う場をもつた。すると、共通体験を基に、活発な話し合いが始まった。「とんとん(スタンピング)は水を使わないほうがふんわり優しい感じになったよ」「シャカシャカ(スペッタリング)は水が多いと大きな粒が落ちてしまうよ」など成功例・失敗例を積極的に出し合う姿が見られた。また、「つんつん(点描)は筆を立てるときれいに描けたよ」というようなコツを教え合う様子も見られた。話し手は相手にわかりやすく説明しようとする姿勢が、聞き手は真剣に友達の話を聞こうとする態度が感じられた。ワークシートの振り返りでも友だちからのアドバイスを受けて、書き込んでいるものが多かった(資料1)。

③は八枚の紙をつなげるための用具とつなげ方の話し合いから始めた。のり、ボンド、セロハンテープ、ホチキス…、貼り合わせる、上下や左右に重ねる…など子どもなりのイメージを発表しあった。ここで教師から<接着剤を使わない><立体的につなげる>という課題を投げかけた。子どもは驚くとともに、主体的に話し始めた。「紐で結ぶんじゃないかな?」「どうやって結ぶの?」「きりで穴を開けて紐を通していいよ」と話がつながっていった。さらに「はさみで切り込みを入れてはさむといいよ」「二ヶ所切り込む

・条件C 多様な考え方から選択する

自分のイメージを言語化し、伝え合い、聞き合う活動を通して多様な考えにふれ、よりよい表現を模索する姿を期待して実践を行った。

4年生の題材「ふしぎな花」では、「誰も見たことがない、自分だけの花」をテーマに想像画を描いた。子どもが自分の花のイメージをアイディアスケッチした後、一人一人が自分の思いを全体の前で発表する交流の場を設定した。A児「傘から芽が出てきて雲になり、カラフルな雨が降ってくる花を咲かせたい」、B児「花粉がいっぱい飛んで、種が人を追いかける花にしたい」、C児「時計の針からどんどん茎が伸びる面白い花にしたい」など、言語化することによって自分のイメージがより具体的になり、咲かせたい花が次第に明確になっていったようである。また、友達からの質問や感想、友だちのアイディアの発表を聞くことで、さらに深く自分の花について思いをめぐらせる姿も見ることができた。友達の感想から広がったイメージを付加して描き進めた子ども（写真5）、交流の結果新しいイメージが浮かび、違う花に書き変えた子ども（写真6）、友達とのかかわりによって自分の作品に迷いが生じ、新しいイメージと組み合わせて描いた子ども（写真7）など様々な表現が現れた。話す聞く活動を通して、子ども一人一人が自分らしい花とは何かを深く探り、自分の内面を見つめ、比較したり、関連付けたりする姿を見ることができたように思う。様々な考え方や表現方法に出合うことで、イメージがふくらむ子どももいれば、考えがまとまらず悩み始める子もいる。その過程の中で、多様な考えの中から最も自分の思いに合うイメージや表現方法を選ぶことが大切である。そうして明確な自分の価値意識をもつことができるようになっていったようである。

A児は「カラフルな雨と雪が降るお天気花」、B児は「日食の光で咲く、虫をひきつける花」、C児は「譜面台から咲いた、音符のカラフル花」として製作を進めていった。彩色に入り、既習の絵の具の技法を使うにあたって、「雨や雪が降っている感じをシャカシャカ（スペッタリング）で表現したい」「種が飛んでいる感じをつんづん（点描）で丁寧に描きたい」「優しい音楽と怖い音楽の雰囲気をとんとん（スタンピング）で表したい」と自分の花のイメージを的確に捉え、効果的な技法を選んで表現する姿が見られた。また、友達の技法の使い方にヒントを得て、自作品に活かそうとする子どももいた。

4 今後に向けて

以上のような実践を行ってきたが、創造的な表現活動を進めていく上で、どのタイミングで話す聞く活動を行うことが有効なのかを再検討していく必要があると感じた。また、学年の発達段階によつて、話し合いの必要感が形態や場に影響されやすいことも課題として見えてきた。これらの課題をふまえ、話す聞く活動が次の表現意欲に結びつくような実践に取り組んでいきたい。

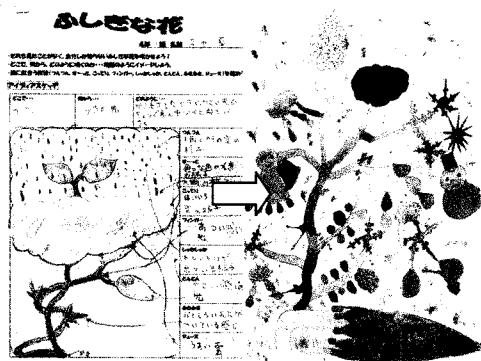


写真5 イメージを付加して描き進んだA児
「傘から芽が出てきて雨を降らせる花」→
「カラフルな雨と雪が降るお天気花」

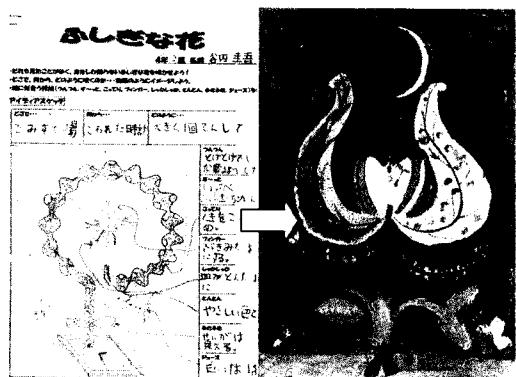


写真6 新しいイメージで描き変えたB児
「種が人を追いかける花」→
「日食の光で咲く、虫をひきつける花」

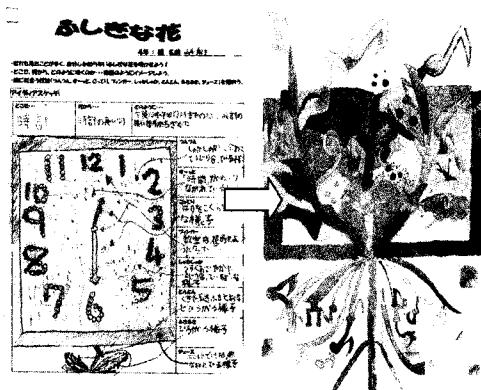


写真7 二つのイメージを組み合わせたC児
「時計の針から咲くカラフル花」→
「譜面台から咲いた、音符のカラフル花」

くらべて表現・鑑賞し合うことで育つ音楽のちから

橋本 俊彦

1 条件設定に当たって

学習指導要領では、高学年の音楽科には「中学年までに身に付けた音楽的な能力を基に、能力を確実に高める」ことが求められている。ここで大切なことは、一人一人の子どもが、中学年までに、音楽科のどの領域でどのような音楽的な内容について、どの程度の音楽的な能力を身に付けてきたかということである。また、授業の場面に応じて、その能力を活用できなければならないことから考えれば、個々が身に付けた音楽的な能力を自覚していることが重要となってくる。その際、どのような学習過程を経て身に付けてきたものなのかを理解していることが望ましい。しかし、何よりも本来は目に見えない音や音楽というものに対する能力の高まりについて、分析的に自覚することは難しい。

そこで、養われてきた音楽的な能力をもとに、意識しない表現と意識した表現という比較の視点を持ち、より具体的に幾通りかを表現することによって、音楽を特徴付けている要素（後述）などを再認識することができる。そして、その違いを感じ取って表現することで、その違いを聴き分ける鑑賞の能力も育つであろう。それは、自己内評価で区別して表現できたということではなく、他者の認知によって表現できたととらえれば、かかわる姿がすべての前提になってくる。子どもどうしのかかわりの中で、自らが幾通りかくらべて表現して友達に鑑賞してもらったり、友達の表現や範唱・範奏をくらべて鑑賞したりする活動によって、自己内での比較、友達間での比較、自分と友達との比較がうまれ、表現の技能や鑑賞の能力が相互に高まるととらえた。

これにより、中学年までに身に付けた音楽的な能力が幾度となく活用され、音楽を特徴付けている要素などの何をどのように工夫することで、表現がどのように変化するかを自覚しながら習得することにつながる。さらに、様々な楽曲に出会ったときにでも、自らの基準を持って感じ取ることができるちからの育成につながるととらえた。

これらの「くらべて表現・鑑賞し合うことで育つ音楽のちから」を養うための条件を、以下のように設定した。

- ・条件A 音楽の言葉を正しく理解して表現・鑑賞する
- ・条件B 比較の視点をもって表現・鑑賞する
- ・条件C 相手の表現をいつも好意的に聴く

2 条件について

・条件A 音楽の言葉を正しく理解して表現・鑑賞する

音楽を特徴付けている要素とは、音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なりや和声の響き、音階や調、拍の流れやフレーズなどである。また、反復、問い合わせ、変化、音楽の縦と横のつながりなども音楽の仕組みとして学習指導要領の指導事項に記されている。さらに、活動の場面において、わずかな違いでもくらべて表現・鑑賞できるように、歌唱表現では、歌詞（言葉）、イメージ、発音や発声（子音、姿勢、呼吸、息の強さ、ひびき、おなかの支えなど）、リコーダー表現では、タンギングやその強さ、息の強さと、より具体的なものを位置付ける。

これらの音楽を特徴付けている要素など（以下、音楽的視点）について、一人一人の子どもが言葉の持つ意味を正確に理解して、自分の言葉で音楽的視点について話すことができることで、「くらべて表現・鑑賞」する際に、友達と伝え合うことが可能となってくる。

・条件B 比較の視点をもって表現・鑑賞する

養われた表現の技能は、意識的に使い分けるまでに至って、はじめて自分の意思で活用できると言えよう。子どもが様々な楽曲に出会ったときに、音楽的視点をもって鑑賞し、自ら表現の技能の向上を段階的に認知しながら、できるようになったという判断にたどりつく姿である。そこで、とくに小

学校音楽科では、基礎力というべき音楽のちからを習得させる必要があることから、何がどのように習得でき、さらにどのように向上したのかを振り返るとともに、意識的に表現し分けることを取り入れる。

リコーダーの奏法においては、音楽的視点をタンギングの有無だけにして、二通りをくらべて表現・鑑賞するのであれば、表現する子どもの演奏技能や聴き取る子どもの鑑賞の能力に、それほど高いものの求めなくてもよい。しかし、高学年になると、自らの感性を基にタンギングの強弱を工夫した二通りの演奏となれば、表現する子どもには高い音楽表現の技能が、それを聴き取る子どもには感受力や高い鑑賞の能力が求められる。

音楽的視点について、何をどのように意識して表現すると、求められる楽曲の表現がどのように変化するのかを認知させたい。

・条件C 相手の表現をいつも好意的に聴く

さまざまな音楽の表現について感じ取ったものを言葉だけで伝え合うことに、もともと大きな壁がある。聴きくらべる表現が、わずかな違いであればあるほど、言葉では伝ええないことがある。また、わかっているけれどうまく表現することができないということもある。そこで、聴き手は、音楽的視点の何をくらべて表現しようとしているのかを可能な限り理解しようと努める姿勢が重要な要素となる。好意的に音や音楽を聞くことで、音楽的な感受や鑑賞の能力がより高まる。違いを見つけてあげようとする立場でかかわり、互いに好意的に聴き合う集団からは、音楽の技能だけではなく、ともに音楽を楽しむ姿が広がることも期待できる。

3 おもな実践

(1) 歌唱表現において（第6学年～合唱練習～）

- ・条件A 音楽の言葉を正しく理解して表現・鑑賞する
- ・条件B 比較の視点をもって表現・鑑賞する
- ・条件C 相手の表現をいつも好意的に聴く

① ねらいについて

子どもは、主旋律（おもにソプラノパート）に大きな興味を示し、アルトパートは人気がない。また、アルトの子どもは、パート練習よりも全体練習を早く行いたいという意識が高い。

そこで、楽曲「心の中にきらめいて」の二部合唱をつくりあげる学習において、旋律を重ねることによる楽曲の魅力を感じ取るためには、それぞれの旋律の表現の工夫が大切だということに気付かせたいとねらい、パートごとに音楽的視点をもとにした単旋律の表現を工夫することに重点を置いた。そして、二つの旋律の重なり合う美しさを味わうためにはそれぞれのパートでの表現の工夫が大切だと気付く姿を目指した。また、二つの旋律が重なることで生まれるハーモニーを体感し、楽曲の持つ魅力をさらに味わわせることで、アルトパートの旋律が、合唱の美しさを味わうために重要であることも自覚させ、アルトパートの子どもには、旋律を重ねてはじめてわかる低声部の魅力を感じ取らせたいと考えた。

そのために、音楽的視点を四つのみとして、視点ごとに個々に振り返る活動を取り入れた。二人組、小グループ、パート、全体と、内容に応じたかかわりの場を設け、互いの表現から良いところを認め合う中で、音楽のちからを高めようと、次の視点で試みた。

- ・音楽の用語を正しく理解して話したり書いたりできるように、表現活動でおもに用いる音楽的視点を「音程」「リズム」「ひびき」「イメージ」の四つとする。
- ・楽譜を中心としたかかわり方ができるように、楽譜と関連付けて表現・鑑賞させる。
- ・視唱の能力を高めるために、楽譜で確認しながら、旋律と音楽的視点の関係などを理解させる。
- ・音楽的視点が意味する表現内容を理解できるように、教師がさまざまな表現を範唱する。
- ・音楽的視点を体感できるように、教師の表現につづけて子ども一人一人に順に反復表現させる。
- ・言葉で言い表しにくい表現の違いを音で伝えるために、友達の表現を聴いて模倣し、自ら望ましいと思うものをつづけて表現させる。

- ・音楽的視点をもとに教師や友達の表現を聴き比べて、自分がよいと感じる表現を明らかにさせる。
- ・友達と自分の表現を比較して、自分の思いを言葉と音で友達に伝えさせる。
- ・友達の感じ方を参考にしながら、さまざまに表現を工夫させる。
- ・どの音楽的視点がどのように表現されているかを把握するために、振り返りシートを用いる。
- ・振り返りシートの内容を教師がまとめて提示し、次に楽曲の何をどのように練習すればよいかを確認させる。(全体の意識と個々の意識の差異を感じ取らせる)

② 実践から

パート練習に取り組む子どもの姿は、音楽的視点をどれくらい向上させているかという立場で、積極的にかかわっていた。具体的には、楽譜をもとに、「この音程がそろっていない」という聴き手の発言から、「今は○○(歌って表現)のように歌ったんだけど、□□(歌って表現)のように歌つた方が、音程がそろうよ」と、音程の不正確さを指摘する姿へと変容した。そこから、より良いと感じる表現を誰ということなく提示して、みんなで共有する姿へと高まっていった。さらに、上記の四つの音楽的視点について振り返りシート(後述)で記述および評点でまとめて、次時に提示することで、個々のとらえている課題が同様であることに気付き、パート全体で向上させたいものも明らかとなり、練習意欲も高まった。また、アルトパートの子どもの変容は大きく、音楽的視点を向上させることに集中し、また全体練習でも自分たちの旋律の自信を持って音を重ねる姿が見られた。

振り返りシートの自己評点のクラス平均値が、表1である。Bはパート練習を始めた段階(Before)で、Aはパート練習を終えた段階(After)である。これを次時のはじめに提示し、さまざまな分析を行った。例えば、音程が9.0ポイント(最大10ポイント)なのは、どこが不確かなのかを記述をもとに個人と平均を比べながら確認できた。また、イメージのポイントを上げるために話し合いが生まれ、歌詞やフレーズに関連して共通理解がなされた。そして、取り組むべき課題が共有されることで、それを克服しようとする新たな意欲が高まり、本時のパート練習の重点を確認し合うこともできた。

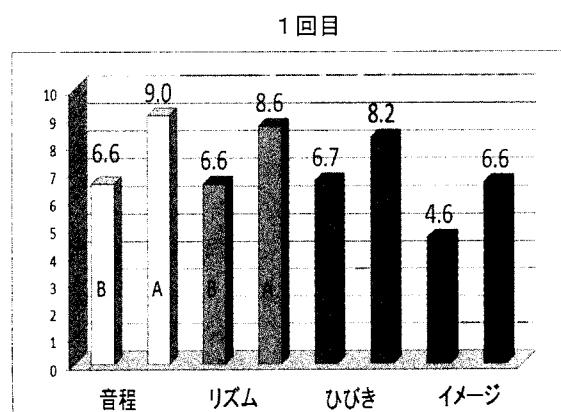


表1 振り返りシートの評点(平均値)

本時の最後に取った振り返りシートでの自己評点が、表2である。音楽科の授業時数の関係で、継続した学習が行われないこともあります。前時に高まった音楽性はパート練習開始時には低下しているものの、本時を終えて前時よりもさらに向上したと自覚する姿がどの音楽的視点でも明らかとなつた。1回目の振り返りシートのBよりは、2回目のBの方がいずれも若干ポイントを上げていることから、わずかな向上の積み重ねの重要性を改めて感じ取ることができた。また、音楽的視点を四つにしほって、その途中経過を提示することで、練習そのものが焦点化されていた。

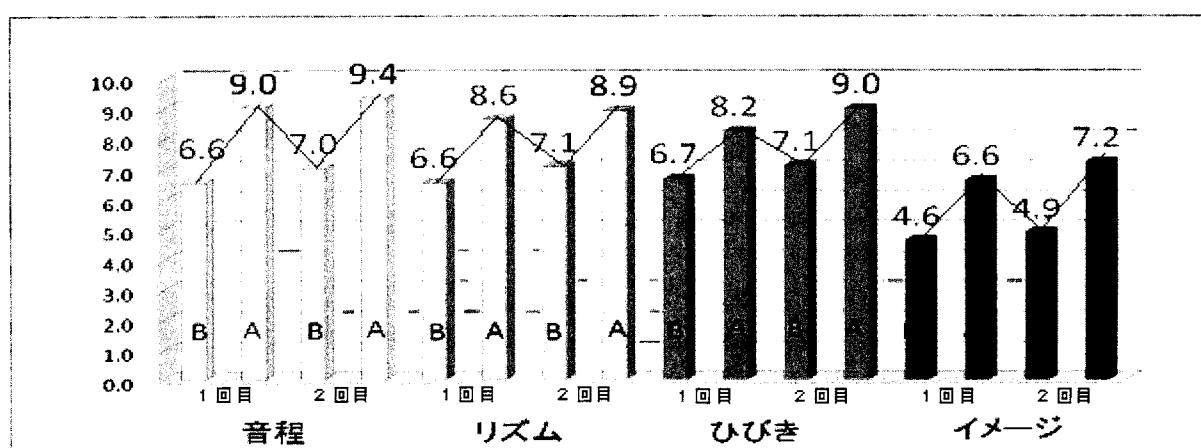


表2 2回分の振り返りシートの評点(平均値)

(2) 器楽表現において（第4学年～リコーダーの個別学習～）

- ・条件B 比較の視点をもって表現・鑑賞する
- ・条件C 相手の表現をいつも好意的に聴く

① ねらいについて

第3学年から授業に導入されているソプラノリコーダーだが、今年4月に出会った子どもたちの技能の個人差はかなり大きく、リコーダーでの表現ができることやできないことへの関心が低い現状にあった。そこで、子ども一人一人がリコーダーの音色に興味を示し、教師の範奏や友達の音色を注意深く聴いたり、教えてもらったりするという姿を目指した。

そのために、リコーダーの教則本をもとにして、一人一人がリコーダーという楽器に自主的に向き合い、個々のペースで演奏できる楽曲を増やしていく活動を取り入れた。

② 実践から

子どものリコーダーへの関心は、少しずつ高まりを見せ、友達の演奏できるようになった姿やその教則本に貼られた合格のシールを見て、自分も友達のように吹けるようになりたいと活動に積極的に取り組んでいた。のために、教師や友達に教えてもらう場面が数多く生まれ、友達どうしのかかわりでは、以下のステップを取り入れていた。

練習中の子ども（以下、吹き手）は、まず自分がどれだけ吹けるようになっているのかをすでに吹けるようになった子ども（以下、聴き手）に聴いてもらうことからはじめる。（右写真①）そして、楽譜上のどこをどのように工夫すべきかを、楽譜をもとに互いが明らかにして（右写真②）、聴き手は、吹き手の演奏を模倣したものと、楽譜通りの演奏をくらべて示す（右写真③）というステップである。その後は、吹き手は、その違いを聴き取って、自らの表現を向上させるために同様なやり取りを続けることになる。もちろん、教師や吹ける子どもの範奏をもとに、吹き手が何度も練習を重ねる方法もあるが、より吹き手と聴き手の音楽力がそれぞれ高まることを重視した。

それにより、吹き手と聴き手に以下のようないい處があった。

<吹き手（練習中の子ども）>

- ・楽曲内的一部分でも吹けるようになったことを友達に認めてもらうことができ、スマールステップとしての意欲の持続ができた、リコーダーの演奏に対して個々に自信がついた
- ・教則本をもとにかかるために、音符や休符、音楽の言葉の理解が進み、途中の小節から演奏することもできるようになった
- ・自分がわからないことやできないことがあつたら、友達とのかかわりの中で解決しようとする態度が養われた。また、友達との人間関係が良好になってきた

<聴き手（吹ける子ども）>

- ・音を注意深く聴き取ることができるようになった
- ・音楽的視点の何をどうすれば良いかを的確にアドバイスできるようになってきた
- ・合格した時よりも、さらに表現の工夫がみられることが多くなった

4 今後に向けて

教師や友達の表現をくらべて表現し合うことで、音楽的視点を意識して表現する態度が養われ、表現力が向上してきた。また同時に、注意深く聞くことから、鑑賞の能力も高まってきた。また、音楽的視点をもって自ら幾通りかの違う表現を試みる子どもの姿も増えてきた。しかし、まだまだ明らかな違いのある表現の聴き比べとなっていることが多く、少しづつ細かな表現の違いを思いとともに表わせるように努めていきたい。

